

建設通信新聞 1995年10月27日
前川建築設計事務所創立60周年記念特集

テーマ：「私たちは、建築をこのように考え、つくるとしています」

『KEEP MIXING WITH PEOPLE 』

坂田 泉

設計から現場の監理まで五年に及んだ長いプロジェクトの終わった昨年4月から一年間、事務所を休職してアフリカのケニアの大学で建築を教えてきた。その体験は僕にさまざまなことを考えさせ、教えてくれたのだが、ここに書きたいのは別の話だ。

大学の仕事の合間にナイロビの道端を歩き廻り、路上生活者の暮らしをスケッチした。そのスケッチが80枚ほどたまったころ、周りのすすめもあって市内で個展を開くことになった。ある日、その会場にぶらりと一人の学生が入ってきた。ひとつひとつのスケッチを喰い入るように見て回り、最後に入口の椅子に座る僕に話しかけてきた。その学生の言葉がいまも忘れられない。彼はナイロビ大学の建築学科の学生。知的で落ち着いた風貌。日本の若者がなくした懐かしい眼をしていた。そして、彼はその眼でまっすぐに僕を見て、こう切り出した。これからも人びととともにあり続けて下さい KEEP MIXING WITH PEOPLE と。なぜなら、と学生は続けた。人生の長さには限りあるのだから。でも忘れないでほしい、人生の深さは限りないということ。そして人びととともにあることこそが、あなたの人生を深くするのだから、と。ひとつひとつ言葉を選びながら、自分自身に言い聞かせるように語るのだった。彼がこんなことをいうのは、ケニアの多くの建築家が人びととともにはいないからだ。彼自身エリート予備軍の一人であって、たぶん社会の上層部で生きてゆくことを約束されている。僕が街の底に生きる人びとに眼を向けたことは、彼のなかになにか熱い驚きをもたらしたようだった。

最近、監獄から出てきたマイク・タイソンが、古巣に残る若者たちにこんなことをいったそうだ。僕を通して自分自身のあるべき姿についてももう一度考えてほしい。いい言葉だと思う。チャンピオンの言葉にはとうてい及ばないにしても、僕のスケッチとの出会いが、あの学生の人生航路にいままでとは違う小さな志を与えたことが、僕には本当に嬉しかった。僕もいつまでも人びととともにありたい。そして20年後の彼にあってみたいと思う。